安部 憲明

外国人による日本論の味わい

外国人による日本論には，1粒で3度，の味わい方があるように思われる。

第1の味わいは，等身大の自身の姿への「気づき」だ。岡目八目，言い得て妙，と膝を打って納得するばかりではない。逆に，外国人の誤解や無理解に対して抱く反発や違和感をひっくるめて，の効用である。第2は，翻訳の妙味。「もののあはれ」という，淡い輪郭ながら我々の感受性に確固として実存する概念を，多くの外国人研究家が彫琢してきたのは，各々の言語体系の構造や語彙で，日本固有の事象や精神の「近似値」に迫ろうとする試みにほかならない。すべての日本人読者は等しく先天的に，その成否を判定する資格を持つのだから存分に味わおう。第3は，著者との交流だ。日本人読者だと明かして質問や読後感を送れば，かなりの確率で返事がある。対話でしか得られない著者の思いや秘められた事実に触れた時の感動は格別だ。

まず，「気づき」の効用について。『菊と刀』や『日本人とユダヤ人』などの古典的名著は，外なるレンズを通じて，我々日本人の意識の下にある内なる特質を鮮やかに自覚させてくれた。時代を遡り，明治維新の頃の地誌や民俗をつぶさに描いた『日本奥地紀行』や『一外交官の見た明治維新』などは，史料としても一級品だろう。頁を開けば，我々が近代化の過程で失った風土が，実に生き生きと目前に展開する。我々は，なぜか「文明」の後光をたたえた冒険家や宣教師，お雇い外国人の筆致におおむね好意的だ。理由の半分は，外国人著者たちの温かい眼差しゆえだろうが，もう半分は，そこに描かれる，「異人」との対面で我々のご先祖様が見せた警戒心や好奇心，羞恥や矜持の反応が，日本人の多くがどこか懐かしむ心象風景に訴えるからではなかろうか。もちろん，親日家だけが日本論を書くわけではない。本誌読者の方々には，80年代の日米貿易摩擦の残像と『日本権力構造の謎』や『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などの日本異質論とが脳裏で固く結びついている向きも多かろう。

2014年に刊行された「逆境をたわめて―日本，その生存の技法」とでも直訳される日本論（原題：Bending Adversity: Japan and the Art of Survival）は，外国人ジャーナリストの筆による，東日本大震災前後の諸相を紡いだ現代日本の肖像画である。邦訳は，『日本―喪失と再起の物語：黒船，敗戦，そして3・11』（早川書房）と題される。著者は，デービッド・ピリング氏（Mr. David Pilling）。2002年から7年間，フィナンシャル・タイムズ紙の東京支局長を務めた。37歳で赴任した土地と人を敬愛し，いつか自分も日本論を，との願いを，震災直後に居ても立ってもいられず被災地に急行し，断続的に訪日を重ね，50歳目前でやっと叶えた。記録でも礼賛本でもないと言う肖像画は，検証可能な事実で輪郭を描き，過去と現在の遠近法を駆使し，右も左も，市井の被災者，日本人の経営者，作家や思想家，政治家，内外の専門家の叙述や肉声を絵具として画面縦横に塗り込む画法による。

文中にも何度か登場するジョン・ダワー氏の名著『敗北を抱きしめて』が，戦後日本の復興と転生を，精神構造と政治社会論の両面から丁寧に分析してみせた着想に似て，著者は「3・

11」を現代日本の国家や社会の営みの究極の到達点・転換点と見る。大震災は，高齢化やバブル崩壊，中国の台頭などによって引き起こされている日本の趨勢的転落に，いよいよ引導を渡した，と誰もが思った。「失われた20年」の間，内外には日本の再興能力を懐疑する論説が溢れ，日本人自身ですら将来への希望や自信を失いつつあった。しかし，著者は知っていたのだ。外的衝撃が大きければ大きいほど，日本の民族や社会は，その中に種子として宿す驚異的な適応力や変革力を発揮することを。厳しい冬の時代の試行錯誤が豊饒な土壌となり，瓦礫の中から本来の花が開くことを。「3・11」は，どっこい，日本人の不断のひた向きさや，黒船来航や日露戦争，先の敗戦といった数々の国難の度に発揮してきた回復力を覚醒させた，と説く。本書の目次には，我々が近年煩悶してきた，経済・社会保障やエネルギー・原発政策，改憲や「普通の国」の国家像を巡る議論，先の大戦の歴史認識，日米同盟や対中外交等の論点が並ぶ。そして，再び国民の信託を受けて登場した安倍政権は，これらに関する政策を果断し，未曽有の危機で「吹っ切れた」日本を見事に体現している，と論じる。安易な勝ち馬論評ではない。巻末には，ABC順に，オウム真理教，武士道，長州，A級戦犯に始まり，連合国軍最高司令部，就職活動，東北，東京電力，靖国神社という用語集が語を連ねる。索引を覗けば，著者が「そこそこ」と謙遜する日本語で取材した語り部の実名の数が，重層的で多角的な論証を裏づける。

第2の味わいは，翻訳である。歴史学の泰斗E・H・カー氏の『歴史とは何か（原題：What is History?）』の文章で，過去と現在と未来を照らす「光」の原語が，何気なく思っていた「ライト（light）」でなく「ビーム（beam）」と知った刹那，歴史的事実とは，茫漠とした行燈の灯に陰影とともに自然と浮かび上がるものではなく，真っ直ぐな人工光線を時空のひだに正確照射させて掌握すべきものなのだと，歴史家の厳しい決意に刮目した。上述のピリング氏が，著書において，日本人気質を表す単語として多く用いる「レジリエンス（resilience）」というキーワード。我々は，主題と文脈に応じ，回復力，恢復力，強靱性，しなやかさ，粘り強さ等と日本語を使い分けるが，著者はそれらをこの1語に代表させる。外国語に置き換えた時に失われてしまう何か（lost in translation）を意識して読むと，思わぬ発見があるかもしれない。

最後の味わいは，著者との交流だ。米国留学時代，外交官はことばが命とばかりに，本は読み散らさず，気に入った文章は暗唱し，さらに要旨や感想を書く基本動作を繰り返した。著者への手紙は，その社会実践編。ここまですると，1粒で云々，というきれいな要領はどこかに，あんこう鍋の如く骨の髄までしゃぶり尽くすやり方に近い。『Memoirs of Geisha（邦題：さゆり）』の著者アーサー・ゴールデン氏は，胸に秘めた創作動機や語られざる真実を繊細に綴る便せん数枚の返事をくれたが，登場人物に名誉棄損や契約違反で訴えられた後日譚があり，今となっては後味が苦い。そして，この愉しみ。既に鬼籍に入られた大先生に通用しないのが難点だ。

外国人が描く日本人の鼻は，実物よりも低いこともあれば，高いこともある。よくよく翫味したい。

あべ　のりあき　外務省経済局政策課企画官